

〔14番 高原邦子 登壇〕

○14番（高原邦子）

発言のお許しを得ましたので質問させていただきます。

改選後初の議会となるこの3月定例会ですので、令和6年度の予算審議の議会でもあることも含めて市長の所信と選挙のビラに書かれていた市民への約束等を参考にして、今回は質問したいと思います。選挙を経ていろいろなことを私も経験しまして、今日はその思いを伝えていけたらなと思っています。

選挙というのは2月11日のその日だけではなくて、その前からずっと活動をしているわけですので、選挙に向けて市民の声を私もいっぱい聞きました。今、水上議員とのやり取りでエビデンスの問題とかいろいろなことを言われて、市長は科学的なもので物を言ったりするんですが、私はあえて感情で物を言います。人間は感情の動物です。今回は本当に感情を込めていきたいと思っています。それはなぜかと言いますと、本当に多くの方々が亡くなられたんです。私、お葬式へどれだけ行ったか分からない。その中には回ったときにいろいろな相談ごとを受けていた人がいて、それをしっかりと形に出して応えられなかった。そういった思いもありまして、人間は死んでいくもの、ずっと生きてはられないものということを心に感じていますので、感情ばかりではいかんとかいろいろ言われるかもしれませんが、一番多くの方々が望んでいることを市政はやっていくべきだという思いで質問させていただきたいと思います。

以前、市長とのやり取りでスクラップ・アンド・ビルドの考え方を聞いたことがあります。昨日も澤議員のところで市長は賛成ではないような意見で、私のときもそうだったと記憶しています。今回いろいろな事業を財源確保の観点から予算化を見送っております。今も本当にこの議会で予算が足りないとかって暗い話ばかりです。「入るを量りて、いずるを制す」、本当にこの言葉というのはよく聞きます。必ず市長は使われますよね。でも、それを感じるなら節約もちゃんとしているのかなと私は言いたいです。節約もして、そして入ってくるもの、それでもって出るものを考えていきますよと。では、どれぐらい市はいろいろな事業を精査して節約とかをしているのか。

そして、アウトソーシングのことも先ほど出ました。職員が少ない中でいろいろなことをやっていたいかなければならない。これは本当に理解するものですが、先ほど水上議員も「多く増やしていたような。」ということをおっしゃったけど、アウトソーシングを推進していくなら物件費も上がりますし、庁内の組織編成をどのように考えているのか。ただ、答えは大体分かっています。先ほどおっしゃいましたが、役職がないと職員のモチベーションも高まらない。だから係長ぐらいで終わってしまうといかんとおっしゃいますが、では市民感情から見ればどうなのか。いろいろなことやってもらいたいなと思っている中で、庁舎内の組織だけは今までと同じような体制でいいのか。もちろん本当にオーバーワークしている部署を私も知っていますし、職員が足りなくて、マンパワーが足りなくていろいろな施策をやりたいけれどもできないのは百も承知していますが、あえてこの庁内の組織のこともお伺いしたいと思います。

2点目、杉崎公園の休憩施設は、私はとてもその案はいいなと思っています。実際、自分も孫を連れて遊びに行ったときにもそれは感じました。今回「自分の提案が本当に実現した。」と

いう稀有な経験で成長を促す。」とありました。ほかの事業などでも生徒などが入って提案されているものもあると思いますが、この場合は採択されました。でも、入っていたけど採択されていません。そういった事業の線引き、その基準はどこにあったのか、メルクマールはどういった点だったのかお伺いしたいなと思います。

生徒たちが入っていなかったけれども見送られた事業はいろいろありますよね。そういったものについては、丁寧な説明が必要だと思っています。神岡町のことで言うならば、鉱山資料館のこととかをいち早く聞かれました。「なんでよ、なんでよ。」と。ですから事業が見送られたということは、それに関わっている人だけではなくて、その話を知っている人たちにとってはとても大切なものでありますから、私は丁寧な説明が必要と考えています。また、見送った事業、予算の当てがつけばやりますとか何とかとは書いてありましたが、では、それを選ぶ優先順位はどうなのかもぜひお答えいただきたいなと思います。

3点目、市長はお約束の中に「地域コミュニティー組織の再編」とか書いてあったんですね。コロナ禍以前には地域で新年会とか、年度が変わるときの飲み会も入った会が地域で行われていたのですが、このお正月にいろいろな地域を回らせていただきましたら、新年会も行われていない地域が8割以上、9割に近かったです。では、この地域コミュニティーの再編をお約束に掲げてはいますが、市長はどのような地域コミュニティーを念頭に置かれているのか。高齢化が進んでなかなか地域コミュニティー、役をやる人とかそういったことも難しい中でどうなのかなと。でも能登半島地震のような、ああいった災害を思うとやっぱりコミュニティーは絶対に必要なんですね。ですから、これは本当に急ぎの課題であると私は思っています。そこを聞きたいと思います。

4番目、昨日もいろいろなところで出ていましたけど、飛騨市の飲食店の閉鎖や事業所の撤退は本当に危惧されています。その中で、タクシーを利用したくてもなかなか捕まえられなくて、神岡町の場合、夜飲みに出ましてタクシーを呼ぶんですが、「今、上宝に行つとるもので、1時間ちょっと待ってもらわんと戻って来れん。」とか、本当に捕まらないものですから、夜の客足に影響を及ぼしているなど。そうすると飲食店がまた1件、また1件となくなっていきます。神岡町の場合、今新しくホテルみたいな形で参加されたところもあるんですけど、食べる場所がないと、これは高山市も一緒ですが、なかなか泊まっただけなのではないかなと思うんですね。しっかりと食の提供ができることも考えていかなければいけないなとも思っていますが、まずはこの4月から限定的にライドシェアが解禁されるそうです。飛騨市内ではどのような感じなのか。見ましたら、免許取得に係る費用は支援するということになっていましたけど、それだけで本当にいいんですか。タクシーを運営されている方々としっかりと話し合いを持って、そして市が応援できる場所はどこなのかしっかりと応援していただきたいと思いますので、そこをお伺いしたいと思います。

5番目に、市長はよく「プライマリーバランス」という言葉が好きで、それで今回も「引き続きプライマリーバランスの大幅な黒字を実現する。」と所信のところでは言われているんですね。私は、ちょっとプライマリーバランスを重視しすぎではないかなと思っているんですよ。というのは、余りにも施策が消極的になってはいないのか。または選挙のためにいろいろなところを歩いているときに聞いたんですが、得意分野ばかりが目についているというような話も聞きました。

私は議員をしていますから、いろいろなところで市政に関わりを持ってやってもらっているということは十分承知しているんですけども、本当に市民のために職員の方は働いてくれて、こんなところもやっているんだということは分かっているのですが、でも多くの市民の方々はそこまでは分からない。それが現状でしょう。

今回、リフォーム補助金ってすごく人気があって、説明もされていましたが当たらなかった方もいて、その不公平感をなくすようなことも言っていましたけれど、当たらなくてもリフォームされた方もいらっしゃいます。そんな中、令和5年度で終わるということで新しいものに、さっきもありましたけど断熱材を入れたものだったらいいとか、節水型トイレなど省エネリフォームが支援とされますというふうになっていました。今の能登半島の地震を見て、耐震化も入れないといけないのではないかと。高見危機管理監とのやり取りを聞いて、「飛騨市ではそこまでの地震の被害はない。」とおっしゃったのですが、私は東日本大震災のときに親が宮城県におりまして、海岸沿いではなく中なんですけど、潰れている家ばかりではないんですけど、潰れている家を何軒も見ました。だから耐震化していないところは震度5強でも潰れるとなったら潰れますよ。震度6じゃないと潰れないなんて、そんなことはないです。ですから、耐震化診断とか前にやっていたこともありますけど、そういったものも補助とかにして皆さん地震に備えましょうよという感じのことも入れるべきで、防災関係のところの考えを同じ施策の中に取り込んでマトリックス的な予算編成を前からできないのかなと思っていたんですね。

先ほどもえっと思ったのが、森議員のところ「受けたら3年間は駐車場にもしたらいかん、そして売買もいけませんよ。」なんて言っていますけど、住宅分譲とか不動産の低迷が続いているけどそういったこともやっていますなんて言っているじゃないですか。だからやっていることがこっちとこっちで逆のことをやっているんです。ですからもっとそれぞれの部のことをもつなげて政策に生かしていかないと、予算的なこともそうですけど無駄なものになっていくので、そういったこともぜひやってもらいたいと思うんですけど、その辺はどのように考えていらっしゃるのかお伺いいたします。

◎議長（井端浩二）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

全部で5点、ご質問いただきました。4点目のタクシー以外、私からご答弁申し上げたいと思います。

まず、1点目のスクラップ・アンド・ビルドとかアウトソーシングの件ですね。

スクラップ・アンド・ビルドの話、昨日、澤議員のときも少し触れたんですけども、何か新しいことをやるときに既存事業を廃止しなさいという考え方を私は取ってなくて、そういった予算要求のときにそういうルールを守ってきなさいと言ったことも一度もないんですね。ただ、それはその代わりに政策協議というのを丁寧にやっているからということでもあります。

実際の予算編成というのはどうやってやっているかということ、結局、そうやって政策協議をやって中身をかなり詰めていくわけですが、詰めていった後に予算要求するんですね。中身をがんが煮詰めて、やり取りをかなりして、その後に予算要求をしてもらうんですけど、予算要求したときに必要な事業が全部積み上がります。ところが全部やると、例えば仮に200億円だったと。そ

して歳入も見積もるんですね。歳入を見積もると今度は180億円であったとすると、20億円足りないじゃないかという話になってくるわけです。これのつじつまを合わせていくのが予算編成の作業、簡単に言うとそういうことでありまして、家計に例えれば今月ボーナスもらえました。30万円もらえました。買いたいものを積み上げたら50万円になりました。そうすると20万円足りないんだけど、どこを削るという話を家庭でも個人でもしますね。同じことを市役所でもやっているということになります。

その中で、大事なことは財源が確保ができるかどうかということですし、確保ができないということが大半ですから、予算の査定段階で優先度とか、他の事業のバランスとかを考慮して決めていくということになるわけです。

スクラップ・アンド・ビルドというのは、何かをやめればその分、空きができるからということですけど、空きというのは固定化されているわけではありませんので、それを入れ替えるような作業というのはこれだけの大きな組織になりますと、そういうやり方は取れないです。そうすると、やっぱり歳入の上限を見定めて、どれだけ使うかを定める。これが「入るを量りて、いずるを制す」ということになるわけですね。入るを量るときですが、入るの量り方というものがありまして、このくらいまで交付税も税収も入るだろう、限界まで見込むというやり方があるんですが、このときは万が一それを下回った場合に予算の歳出は決まっていますから、いきなりショートを起こすということになるので、これだけは絶対にやってはいけないということになりますから固く歳入を見込む。ですから常に実際入ってくるよりも少し少なめに歳入を見込むというのが、まず一般的なことになります。ここが非常に予算編成の難しいところです。

来年度の予算編成はどうだったかと言うと、実は予算要求を全部積み上げて歳入とのバランスを見ましたら、ギャップが11億円ありました。これを調整して予算をつくったわけですけども、その中で予算化を見送ったものが27件、10.7億円あったということで、これを予算説明の資料に添付してお示ししているということでございます。

こうした形でやっておりますので、スクラップ・アンド・ビルドという考え方ではないんだということはず申し上げておきたいということです。

次に、アウトソーシングと庁内組織の編成についてのお尋ねがありました。

アウトソーシングは、これはたびたび申し上げておりますが、年々増加する行政需要への対応、それから国の施策に連動した業務の増加というものがあって、そもそも職員の業務量が過剰になっているところに加えて、働き方改革で労働時間の削減というのを強く求められている。じゃあどうするんだという、何か仕事をやめますかという話なんですね。誰も何もご要望がなければいいのですが、今議会でもたくさんご要望いただくわけです。これはお金つけるだけでは済まなくて、お金をつけるということは人が仕組みをつくって執行するというものですから、必ず労力が発生するわけです。そうすると、ある程度精一杯皆さんのご要望に応えようとするれば、ぎりぎりの線を見極めてやっていかないといけない。そうすると、外に頼めるものは頼んで、自分のところの余力を見い出さなければいけないということになりますので、それでアウトソーシングという話が出てくることになるわけです。

逆に言い換えますと、現在市が行っている業務を今後も市職員が全部行っていくということは不可能だという見通しがあるということでもありますので、これは皆さんのご要望のバランスの

上で考えていかなければいけないというところに出てきているということをご理解いただきたいなと思います。

これも先ほど水上議員のご質問ときに申し上げましたが、職員の定数について参考までに申し上げますと、かつては定数の中に産前産後休暇の職員分、育児休業、病気休暇、全部含まれておりましたので、1人休職者が出ると途端に人員不足が起こる。市役所の業務が圧迫されているということもございましたので、これではいけないということで定数を増やしたんです。都竹市長になって職員数を増やしたと言われる原因はそこなんです。働いている実数は必要の分なんです、そういうことなんです。

今はこうした求職者等を除く実配置人員を定数内にするという運用に努めておりますけども、今度は採用難というのが来ておまして、定員の充足に至っていないというのが実情で、実は来年度の4月にスタートする分も欠員が既に出ています。そこでスタートということになっております。来年度は令和2年度に策定した定員適正化計画の最終年度ということになりますので、本格的なアウトソーシング元年となることもありますから、これの結果も踏まえて適正な人員配置となるように検討していきたいと考えております。

それから2点目の予算を見送った事業のお話であります。

そもそも予算を見送った事業を提示して、これはどういうことで見送ったんだというのが議員のご質問の趣旨だと思うのですが、世の中的に見るとこんな感じで、見送った事業を公開するなんて自治体はどこもありませんので、普通は黙っているものなんですけれども、あえてオープンにしているということをまず前提に申し上げたいと思います。

予算査定のときの線引きですが、もうこれはひとえに市の真水の財源確保ができるかどうかの1点です。お金さえあればどんどんやりたいということでもありますけど、その1点だにご理解ください。以前、高原議員との議論で職員が予算がないと説明するのはいかなものかというお話がありましたが、予算編成をしている我々の立場からすると正確には「財源がない。」という言い方です。予算がないのではなくて財源がない。予算がないというのは「決めた結果に我々のが含まれていない。」ですが、予算を決める立場からすると財源がないから含んでいないということですので、「財源がない。」というのが正確です。ですから、巨額な事業費の事業であっても、例えば国・県の補助金とか、その他どこかからもらえるお金とか、寄附とか、そういったものがあれば十分予算化できます。なので、大きな建物を建てるとか、鉱山資料館がそうなんです、全部寄附が集まっている場合はいきなりゴーです。でも集まってないので見送りになるということです。逆に100万円くらいの事業であっても、全て市の真水負担の場合はよく考えないといけないと言って見送ることが現実に出てくるということでもあります。

真水の財源も、入ってくる交付税とか税収だけではなくて、借金というのも真水の財源になるわけですね。そうすると、今度は借金をしたら、今後毎年の返済額がどう変わるのか。5年後、10年後、どういう負担になるのか。そのときに財政がどう縮んでいたら返していけるのかどうかということを見極めながらやっているということなんです。ですので、我々は今だけのことでなくて、後の人のことも考えないといけないという責任があるということになります。その上で財源を見込むことができれば採択するし、見込めなければ先送りということになります。

生徒からの提案のお話もありましたけども、生徒からの提案できるだけかなえてやりたいとい

うことで今回やっているのですが、あの中で全部受けれているわけではないんですね。財源が要るものについては、これは無理よということになります。財源がないから無理よということを理解してもらうことも、子供たちにとって大事な教育ではないかなと感じております。

ただ、先送りしたものについて、先ほど何でよという話も出るということをおっしゃいましたが、できるだけ説明をしたいと考えておきまして、屋内運動場の建設見送り、実際やっておりますが、これは長くご要望いただいてきたシニアクラブ連合会の役員の皆様に私から直接説明をいたしました。その際にも申し上げたんですが、「やめてしまうということではなくて、今後も引き続き精査して、財源が確保できそうならまた予算化を考えていきますので。」ということはお申し上げております。これはほかの事業でも同様ということになります。

それから、次に3点目の地域コミュニティの再編の話です。

市長選挙の際に公約を書いたビラを作成したんですが、この中に「地域コミュニティの再編など人口減に対応した体制づくり」という記述を入れました。ここの趣旨でありますけども、当然、行政区とか地域組織の再編というのは地域の意思に基づくということが前提ですが、そうしたことを希望されるケースというのは近年増えております。組織維持存続のために行う再編支援ということをサポートしていきましようというのが、ここに書いた1つの意図したことであるということでもあります。その中には行政区の統合のようなこともあるでしょうし、あるいは河合町地域振興協議会のように、子育てから地域資源活用、伝統文化継承、様々な役割を1つにまとめた複合的な組織をつくるということもあると思います。そうした組織を維持・存続させていくことが防災、非常時の際にも効果を発揮すると考えております。

いずれにしても、人口が少なくなる中では地域コミュニティの従来の組織が個々に存続していくことは難しくなってくる。これは間違いありません。できるだけ複合化を図って、1人の人が複数の役割を果たしていただくということも不可欠になっていくだろうと思います。まずは行政区、町内会の地縁団体とか特定目的のために活動実施しているシニアクラブのような団体、あるいは各種実行委員会等の課題を伺いつつ、持続可能な仕組みを作るにはどうすればいいのかを話し合っていきたいと考えています。

それから、5番目の予算編成の問題は今も触れたので、今度はプライマリーバランスの話をおこころではしたいと思っております。

お尋ねのプライマリーバランスの話ですが、これは厳密な言い方をしますと、ちょっと難しいんですが「基礎的財政収支」と言いまして、歳入予算から市債計上額を除いた額と歳出予算から公債費、借金返しを除いた額を比較するというので、借金に関するものを除いたものを比較するというのが本来なのですが、結局裏表なので、分かりやすいようにプライマリーバランスは借金のことに特化させた形で説明をしています。ですので、本来のところとは少し意味が変わるのですが、そういう言い方をしています。借金をした額よりも返済した額が多ければ、借金総額が減ったわけですから黒字。返した額よりも借金した額が多ければ赤字。これの黒字、つまり借金を少しでも減らす方向に行こうよというのが市の財政的な目標だということなんです。

今、高原議員からプライマリーバランスとばかり言っているから消極的になっているのではないかというお話ですが、ソフト事業に関する限り論理的に考えて、プライマリーバランスの重視が消極的になるということはないんですね。なぜかと言うと、借金の問題です。借金を返すと

いうところは、大体10年なので借りた時点で決まっているんですね。10億円借金すれば毎年1億円ずつ返していくということは決まっています。それは予定どおりに返済してくしかありませんから、そこをベースにしながらプライマリーバランスの黒字にするということは、返していく額よりも小さい額しか借金をしないということですから、つまり大きな借金をしないということになるわけです。

大きな借金というのはどういうときにするかという、市町村は国と違って赤字国債みたいなものが発行できないんですね。何かの目的に充てないといけない。しかも起債できるメニューというのが限られていますので、そういうものを使うしかない。しかも飛騨市は国から交付税が入ってくるようなメニュー以外は使わないというのは厳然たるルールとして決めていますので、どんなものにも借金ができないんです。そうすると、借金ができる事業を見定めてどれぐらい借金ができるかを決めてやっていく。これがプライマリーバランスの黒字を達成するというので、通常のソフト事業の予算とは直接連動しないということになります。

そうした考え方の中で大きなものを見送ったものがたくさんあって、来年度予算編成では屋内運動場の整備とか、鉱山資料館のリニューアルとか、議会の皆さんからもご要望いただいた議場のリニューアルに関する予算も見送っております。そういった形で考えているということであります。

あと、マトリックス編成というのは耐震化とリフォーム助成のような、複合化という意味というふうに把握しましたが、できるだけ一石二鳥でいきたいんです。ただ、政策を議論していくときに目的が違うところからスタートしてみると、後になってよく似ていたよねということが実際あります。それはその時点でまた見直しでいけばいいのであって、最初から全てそこまでの議論がしきれるかという、よっぽど議論していても後になって気がつくということがありますので、その辺はよく考えていきたいなと思っております。

〔市長 都竹淳也 着席〕

◎議長（井端浩二）

続いて答弁を求めます。

〔総務部長 谷尻孝之 登壇〕

□総務部長（谷尻孝之）

それでは私のほうからは、4点目のライドシェアを含めたタクシーの現状につきましてお答えさせていただきます。

市内のタクシー事業者は合計4社ございますが、いずれの事業者もコロナ禍においてドライバーの離職や需要の激減により営業規模を縮小せざるを得ない状況に追い込まれております。コロナ禍後もドライバーを確保できず、特に夜間のタクシー運行台数は各社1台から2台となっており、一度開いた穴を埋められない状況が続いておるところでございます。

タクシー車両が確保できない状況が夜間の飲食店営業にも影響しているという声は伺っておりますが、タクシー事業者からは、これらの需要が週末の夜21時以降に集中する一方で、それ以外の夜間の運行はほとんどない状況であるとの声も伺っております。これはコロナ禍前と比べ、各種団体や地域の会合等に伴う宴会が減少するなど、市民生活の変化によるところが大きいものと考えられ、現在のタクシー事業者の営業規模では、こうしたスポット的に集中する需要に対応

しきれない状況にあることも事実です。

こうした問題を解決するためにも、新年度におきましては免許取得補助金の補助対象を拡充するほか、ドライバー再就職者への奨励金制度を創設し、人材の掘り起こしを行いながら事業者の求人活動を支援することとしておりますが、ドライバー不足の問題は従来のように、各事業者が求人活動によって人材確保するという体制では到底立ち行かない問題であるということも認識しております。

今後は持続的に人材確保できる体制の構築が必要であり、ライドシェアも1つの手段として考えておりますが、こうした取り組みには関係機関との連携、協力が不可欠であることから、綿密な協議を行いながら新たな体制の構築に向けて検討を進めてまいります。

〔総務部長 谷尻孝之 着席〕

○14番（高原邦子）

スクラップ・アンド・ビルドのことを思っていたんですけど、公共施設、指定管理に出しているところとか、いずれどうにかしなければならないなというのは思っていたので、その辺のことを念頭に、例えば飛騨まんが王国のことも言われましたけど、確かにそう簡単に地域でやってきた歴史のある中のことをそう簡単には決められないだろうと。あまり抵抗なく見送るといふか、もう閉鎖してもいいようなものは閉鎖してきているけれど、私は入るを量りてと言うんだったら、そうではなくて出るほうを抑えるということは一番大事だと思うんですね。本当にやってもらいたいことをやっていただきたいと。そうすると予算がないと。実は違うんだってさっき言いましたね。財源がないんだということですが、そう言われてしまうと。市長のおっしゃっていることは、答案用紙に書けば95点、98点、100点も取れるでしょう。でも、人間の感情は、多くの人に関わることと言ったらごみとか環境の問題、そして毎日の暮らしの雪またじとか、側溝とか、草木とか、そういったものは皆さんやっぱり困っているんです。そういったところに充ててないことはなくて、それぞれちゃんとやってくださっているんですが、なかなか行き届いてないところがあると。

そんな中で、先ほども言ったように、頼まれていたけど結局かなえることができずにお亡くなりになってしまったと。人それぞれには寿命がありますし、最後のようやってくれてありがとうなって思ってもらえるようなこと、そんなすごいお金のかかることではないことも優先順位はこちらですと厳しいことを言うのではなくて、多くの人が共通する希望のところは真水でもいいじゃないですか。予算化して何とか皆さんの希望をかなえていく。これ大切じゃないですか。水上議員のときも聞いていたら暗い話でしたね。結局はないと。そしたら市長は「いや、違いますよ。そんなことはありませんよ。」っていういろいろ説明し直したじゃないですか。そしたら私のときもそれを言ってくださいよということなんです。おばあちゃん、おじいちゃんがいつも言われるのは、「私たちは棺桶に足突っ込んでいます。」と。そのおじいちゃん、おばあちゃんのすごい大きな希望じゃないんです。側溝の蓋が壊れていまってとか、そういったことぐらいやりますよってかなえてあげることができないのかなと。プライマリーバランスのことばかり言って、市長は財政をちゃんと健全化してっていいお点がつきますよ。でも、政治には希望というか夢がなければ駄目です。

こんなことを言って本当に失礼なんですけど、市長のことを「お役人や、あの人は。」という

人がいるんです。自分は役人をやったことがないから分からないんですが、お役人をやっていた人が私に言うわけですよ。「あの人はお役人や。政治家じゃない。」って言うんですよ。それで私は政治家というのはどういうものかなと考えたら、やっぱり市長、この1年どうかいい子の都竹淳也を捨てて、答案用紙100点は捨てて、老い先短いおじいちゃん、おばあちゃんをにっこり笑わせる、希望を与える、そういったものに特化していきませんか。子供ももちろん大切。夢を与えることも大切だけど、しまっていられる人によかったと。それは古川土木事務所管轄のことだったんですけど、本当に大変なところを古川土木事務所の方がやってくださったら、12月に泣き声で「高原さん、本当にありがと。」ってお電話をいただいたんです。そして私も見に行きまですって行ってみたらやってくださっていた。

人間人望はあります。特に高齢化で老い先短い人はいっぱいいます。何とか都竹さんが市長でよかった、こんなことしてくれたって思ってもらえるようなことに、プライマリーバランスはこっちに置いておいて、財政調整基金があるんだから、何十億円の金を出せって言っているわけじゃないんだから、夢、希望、みんながよかったなって思ってもらえるのに予算をつけて、もちろん財政課長は渋い顔をするかもしれないけど、そこを超えていくのは政治家だと思うんですよ。市長も政治家になって9年目に入りましたよ。役人は引退して政治家になりましょうよ。どうですか、市長。頼みますからこの1年、いろいろ知恵を使っていろいろな希望をかなえていくと。市長のおっしゃっていることは百も承知だけど、老い先短いじいちゃん、ばあちゃんに、夢や希望を与える政治をこの1年お願いしたいのですがどうですか。

◎議長（井端浩二）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

役人でございまして、だんだん役人になっていくんですが、選挙の話を振り返ったときに最初の所信表明のときに申し上げたと思うんですけど、コロナ禍のときにあまり皆さんの話を機会がなくて、市政報告が何回かあるとまさしく今のような話を聞くわけです。別に市の何とかの政策とかではなくて、どここの側溝の蓋、あるいはどここの雪の囲いを何とかしてほしい。改めてそれを思うわけですね。やっぱりここが原点だということを思いましたという話を申し上げたわけです。そういう小さい、本当に身近な生活のご希望をかなえていきたいという気持ちは何も変わっていないんです。市長になってから何も変わってないし、どんどんプライマリーバランスのことを考えるようになっていっているんですけど、その気持ちは何も変わってないんです。

ただ、毎年こうやって議論を重ねていけば重ねていくほど、分からなかったことが分かるようになってくる。知らないままならいいんですよ。まあ全部やっついてくれればいいということで市長をやれるならいいんですよ。だけど、毎年やればやるほどいろいろなことが分かってくるし、分かってないと現代地方行政はできないんです。なので、全部事務方に任せて、あとはお前らが何とかせいというやり方もあります。私は突然そういうふうになっても構わないですよ。あまり市長室で協議もせず、市役所で協議もせず、それはお前らに任せると。何とかせいと。金を捻出するのはお前らの仕事だとか言っていれば回っていきます。ただ、それをやっていると余裕がある自治体はできるんですけど、こういう小さい自治体はそれではもたない。自分のときはよくても、次の市長、また次の市長のときに必ず困るときが来るので、私は自分のときだけよければと

いうふうにはしたくない。なので少なくとも向こう数十年の範囲で、飛騨市政をどうするかという考えの中で来年どうするかということを考えなければいけないので、それを考えていれば考えるほどだんだん制約が出てくるということなんです。

ただ、コロナ禍の間にそういった機会がなかったことによって、市民の声の手触り感が分からなくなっていたなということはずごく思いました。ですので、改めてそういう本当に小さい願いを聞きたいというのを先日の所信表明のときに申し上げたということですし、おっしゃるようにその中にはこれだったら何とかありますというものがあるんです。それがなかなか伝わってこないということも他方ではあるので、できるだけそういった声が直接聞けるようにしたいというのがある。

その上で、利害はみんな違いますから、例えば同じ地区の中でもこれをやってほしいという人もいれば、そんなことはいいでこっちやという人もいらっしゃる。そうすると、それは誰が決めるんだという話なので、この辺りの仕組みは考えなければいけないと思っています。なので区の要望を出すときに順位をつけてくださいと。皆さんが決めてくださいと。どっちが大きいかというのは皆さんが決めてくださいという仕組みも導入していかないと、市は今でもきちんと点数化してやっていますが、それだけではなくてもう1つそこに地元で優先順位をつけていく。「ようついで決めてくれ。」と言われたら、その代わり文句を言ってほしくないということになりますし、そういうことを決めていくフェーズというのにも出てくるし、そういったところに来ているのかなということも思います。

いずれにしても年数が経ってくるとだんだん分かり過ぎてしまうという嫌いはあるので、そこら辺は上手に加減しながら、できるだけ政治家と役人のバランスが取れるようにしながら進んできたいと思っています。

○14番（高原邦子）

本当にいろいろなことを考えて、私も人生の先が見えてくる年になってきたのかなと思うんですけど、ベンジャミン・フランクリンかな、有名なタイム・イズ・マネーという時間はお金と。これは本当だなとこの頃つくづく思うんです。やっぱり時間を大切にしたいなと思うんですよ。お金も大切なんだけど、時間はそれを生み出す生産性のこととかあったけど、仕事とかを生み出すためには時間が必要だし、それを大切に使うっていくということはイコールお金を生み出すことにもなるしという意味で、これは大切だなと。

市長は何十年先のことを言うけど、はっきり言って何十年先なんて分かりません。これだけ動いている時代で。そうでしょう。私たちの若い頃は携帯なんかなかったから、連絡が取れなくて、恋愛している人たちのクリスマスのやつでテレビの宣伝もやっていましたけど、男女が入れ違いになるということがあるけど、今は違うんだもの。それなのに昔ながらの考え方をしていて、「いや、僕だけがいいと言われるわけにはいきません。」なんて言わずに、今、このときをどう生かしていくか。それは将来のためになるんだって信じた道を行かなければ。10年先、20年先の人のために僕は財政調整基金を山ほど積んでいきますよとか、そんなものははっきり言って駄目です。要は、パラダイムシフトって今までの前例がどうのこうので変えてはいけないものは絶対あると思うけど、私自身変わらないといけないなと思うところもいっぱいあるので、そんなに頭を固く持たずに広く持って、そして市民の要望をしっかりとかなえていく1年にしてもらいたいと思っ

ています。

意を尽くせませんが、私の質問を終わりたいと思います。ありがとうございました。

〔14番 高原邦子 着席〕